

光受寺通信

NO.193

R7.2.1 発行

発行元 光受寺



「人間は特別じゃない」。これは北海道のある牧場主が、あるテレビ番組で話された言葉です。

彼は現在、癌を患い、抗がん剤治療を受けながらの生活をされているということなのです。大自然と深く関わり合いながら、自分も自然の一部の「いのち」として捉えられ、謙虚に生きておられるお姿が、とても美しく思えたのです。そして、その思いは「命の循環」という言葉でも受け止められ、迷いのない確かな人生を歩んでいらっしゃるということが、よく伝わってきました。

私たち人間は、ともすると、この地球上のすべてを支配して生きているかのような錯覚を起こして、生きているのではないか。私は常々そう感じさせられ生きてきたことから、この方の人生のあり方に深く感動させられました。

また詩人の石牟礼道子さんは「地に這う虫と同じような視座で見つめなければ、この世界の深みは見えない」と言われました。

確かに「人間は特別な存在」という思いで自然と関わっているとすれば、このお二人の思いは決まってしまうか、知ることのできない世界なのではないでしょうか。

私の「いのち」は、大げさに言えば宇宙のすべてと関わり合いながら存在しているのです。何か一つが欠けても私は今ここに存在していないのかもしれない。見えないけれども見える、聞こえないけれども聞こえる、そんな世界を教え知らせてくれるのが自然なのかもしれません。

般若心経を読まないのはなぜ？

『般若心経』は浄土真宗や日蓮宗を除く宗派では読誦（とくじゆ）や写経の対象になっていくので、多くの日本人には馴染みのある経典です。

『般若心経』は『般若波羅蜜多心経』が略された言い方で、「般若」は知恵を「波羅蜜多」は至彼岸（とつひがんと）と訳され、修行によって「彼岸」(しがら)から「彼岸」に至ることを教えているのがこの経典です。

つまり、**修行を通して悟りに至る** という教えのことです。

親鸞聖人も比叡山(ひえいざん)において二十年間もの長い間『般若心経』を読誦しながら修行に励まれたと思われれます。しかし、身を煩(わづら)わすらす煩悩はいつでも絶(た)つことができなかったと言われています。つまり自力の教えでは、救われぬ「私」であることに比叡山の生活でお気づきになられたのです。

これはもちろん『般若心経』と「お念仏」のどちらが優れているかという問題ではありません。「お念仏」一つで救われていく教えの私たちには『般若心経』は必要としないということだけのことなのです。

浄土真宗では、お念仏一つで救われていくという教えが説かれた大無量寿経、観無量寿経、阿弥陀教を拠(より)どりどころとしているのです。。

ご先祖の願いを聞いていく歩みに参加しましょう。

春季永代経 三月二十日(木) 春分の日

午前・午後 お齋あり



春の催しのご案内

今年は飛龍梅の状態が極めて深刻で、例年のようには楽しめただけそうにはございません。ただ、「吊りびなの展示」、「書院展」、3月1日(土)には午後1時半より「ガーネット」による「コーラスが開かれます。ぜひお越しいただきお楽しみいただければと思っております。

新しいお仲間をお迎えしよう (今年初の学習会)



一月十八日(土)、曇一つない晴天ではありませんでしたが、意外な冷え込みにうち震えながらの学習会となりました。新しく参加してくださいました方がお二人あって、とてもうれしく思いました。ただこの学習会がお二人にとって仏法を学ぶご縁になるのかどうか、とても心配なことでした。

さて今回は「歎異抄」十二章を学びました。この章は「学問しなければ往生できない」という主張を正(ただ)す章となっております、「聖道(自力)仏教」と「浄土(他力)仏教」の間に起きた様々な諍論(じょうろん)について述べられています。

私たちの浄土真宗では「浄土仏教」の立場ですので、「本願を信じ、念仏もうさば仏(往生)になる」という他力の教えを拠(よ)りどころとしていきますので、学問をしなければ往生できないということはありません。ただし、決して学問を否定しているわけでもありません。「しなければ」という条件を否定しているのです。

○本願とは ○信心とは ○念仏によって往生(仏)するとは
そして今回の会で、一番話題になった「浄土」とは、どうしようもない改めでの確かめともなりました。

そもそも阿弥陀如来さまは、私たちを救うために法蔵菩薩という修行の身に置かれて、浄土という世界をつくり、48の願いによって一切衆生をそこに迎える(救う)ことを誓われたのです。そして、この願いがかなえられなければ私は仏にならないと深い慈悲をお示しくださったのです。

「浄土・極楽」とはいったいどういう世界なの?

阿弥陀教には言葉では言い表せないほどの清らかで美しい世界だと説かれてもいますが、一切平等の世界であるとか、生死を超えた世界、善悪を超えた世界、真如(本来のあるがままの真実)の世界などと説かれ教えられております。

法蔵菩薩はここに迎え入れるために、「わが名(南無阿弥陀仏)を呼んでくれ」と、言葉で言い表せない世界を、あえてことばでしか通じない私たちのために、「南無阿弥陀仏」ということばを使って「願い」を込めて伝えられたのです。そしてまた法蔵菩薩も私たちに向かって南無阿弥陀仏と呼び続けられているのです。

さらには浄土という枠をも超えた無限の広がり、「はたらき」となることを願って、光(十二願)と、無量寿(十三願)を立てられ、宇宙全体を「南無阿弥陀仏」で満たされたのです。

その呼び続けられている声が私に届いたとき、それを「信心」をいただく、と信じているのです。

(私たちが日常的に使う「信じる」は不確かなことに対していう言葉で、実は疑っているというところにほかならないのです。)
「本願を信じ、念仏もうさば仏になる」は、私に届いた念仏は疑いようのない事実として信心となり、念仏を申す身の上となるのです。

今月の掲示板

「いのちの選別」の
先にあるものが
戦争なのかもしれない

明正寺坊守 二池真弓

私たちは自分の都合により、殺してもよい「いのち」と殺されてはいけない「いのち」を作っています。この違いはないでしょうか。その事実は私たちの日常を振り返れば分かっていただけではありません。

そして、この無自覚な思いの延長線上には戦争があり、互いに正義を振りかざし、人と人とが殺し合うことになってしまっています。

お知らせ

今月の学習会 (光受寺)

一五日(土) 一四時より

今月の「お寺サロン」(光受寺)

二十日(木) 十三時半より

二月はお休みです